

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

刹那的で対面的な大都市の人間関係 (私のスケッチ・ブック (24))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005907

刹那的で対面的な大都市の人間関係

国立民族学博物館 助教授

森 明子

■ベルリンの友人

ベルリンの友人のひとりにユーゴスラビア出身の女性がいる。彼女は、失業して1年近くになり、もうじき失業保険がきれてしまうのだが、仕事はなかなか見つからない。

ベルリンの失業率は17パーセントを超える。仕事を見つけることは誰にとっても困難であるが、外国人で、50歳代の女性となれば、悪条件が重なっている。役所や会社の担当者との面談で、ひじょうに不快な思いをすることもしばしばである。彼女を訪問するたびに、住まいが殺風景になっていくのを見て、私も次第に不安な気持ちになっていった。

この友人にはいろいろなことを教えられたが、人に「お金をあげる」ことも、彼女を通してあらためて考えるようになったことのひとつである。

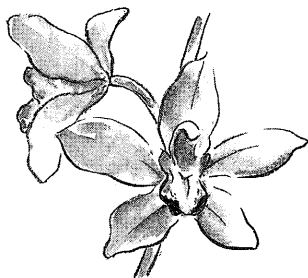
■路上の人々

世界の多くの都市でそうであると思うが、ベルリンでも、小銭を求めて道端に座っている人の姿はめずらしくない。

その人たちのスタイルは、さまざま

ある。貧しさや身体に負った障害が、見るからに気の毒という気持ちを起こさせるときもあるし、パンク・スタイルの若者が、ガールフレンドや犬をつれて座っていることもある。ただ座っているだけではなくて、音楽を演奏している場合もあって、彼らをストリート・ミュージシャンと呼んでいいのだろうか、ちょっと戸惑う。

乗り物のなかでも同様である。地下鉄車内でしばしば遭遇するのは、ギターやアコーディオンなどの楽器をひきながら歌を聞かせるもので、なかにはうまいと思うこともあるが、とんでもない音を聞かせられることもある。客の多くは黙って歌が終わるのを待つ。演奏が終わると帽子を裏返して客席をひとまわりするの



だが、帽子にお金を入れる人はひじょうに少ない。次の駅につくと、演者はいったん車両を降りて、次の車両に移動する。

新聞を発行して販売するホームレスの場合、列車が発車するのを待って、朗々と語りはじめる。乗客である聴衆に、新聞の意義や主張を一節聞かせてから、客席をまわるのである。この新聞発行運動には賛同者も少なくないから、音楽の場合よりお金を出す人は多い。新聞は、はじめベルリンに1紙だけあったらしいが、現在ではグループが分かれたり、新たなものが加わったりして、4紙くらいあるという。

あるとき、高校生くらいの若い女性が、2日前に田舎から出てきて食べるものがない、と乗客にお金を求めている姿を見たことがある。乗客は、これに応じるところか、あきれたような顔をしていた。

■「お金をあげること」について

私の友人は、しばしば路上の人にお金をあげるらしい。私はなんとなくそれを感じ取っていたが、あるとき、そのことが話題になった。

私は、彼らがお金を必要としていることはわかるのだが、自分としてはお金をあげるのはいくらも苦手なのだ、と戸惑い気味にきりだした。彼女は案の定、「なぜ？」と切り返した。私は、自分の考えをまとめながら、だいたい次のようなことを話した。「与える」ということで生じる関係に対して、自分は居心地の悪い曖昧な意識が起こるのを感じる、その意識を自分は避けているのだと思う、と。いま、同じことを尋ねられても、答えは



あまりかわらないと思う。相手と対面しないで「お金をあげる」のは別だ。たとえば、郵便局や銀行を介して送金するときの事務的な手続きは、このような感覚が生まれるのを防いでくれる。

では、街頭で、有志のグループが募金運動を呼びかけている場合はどうだろう。街頭の募金運動は、金融機関や職場、学校などを介してお金を出すことよりはやりにくいのが、路上に座っている人に直接お金をあげるよりは、やりやすい。

こういう感覚は、内面的で微妙なものであるから一般化することはできない。だが、私のこの感覚に思い当たる方も、少なからずおられるだろう、と私は想像している。

この感覚は、何に由来するのだろうか。

■路上のコミュニケーション

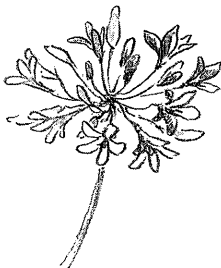
私の友人は、私が微妙な意識が起こる、といったことを理解したようだった。そのうえで、「そういう意識が起こらないように、自分は、お金をあげるときに必ず相手とことばを交わすようにしているのだ」といった。それはたとえば、「今日一日よい日を」というようなことばだという（このことばは、友人と別れるときや、店でお金を払ったあとに、感じの

よい挨拶として交わされる)。

そのあとで顔を合わせたときは、どんな顔をするの、という私の心配には、「感じよい程度に、せいぜいハローというくらい」と答えて、「私はシェパードを連れてバンクにも、お金をあげることがあるよ」と、笑いながらつづけた。

ここで「バンク」と呼んでいるのは、ベルリンの街角でよく見かける、黒い衣服に身をかためて、鋏打ちしたプレスレットや鎖などのアクセサリーをつけた若者のことである。たいてい大きなシェパードを連れていて、缶ビールとタバコを手にし、同じスタイルの友人と路上で過ごすことを好む。若者が10人、大型の犬が10頭も固まっていると、近づきがたい雰囲気だ。ただし、彼らが暴れることはほとんどなくて、少なくとも私は見たことはない。

こういう若者が二人くらい、路上に犬と座っていることがある。その前に空き缶がおいてあるのだが、友人同士で談笑している姿は、あまり困ったふうには見えない。のどかでさえある。私の友人は、そういう若者にお金をあげることもあるというのだ。どうやら、彼らの連れている犬にプレゼントをしたくなるらしい。「その犬に今晚はミートカンを買ってあ



げるって約束しなさいよ」といって彼女はお金をあげるのだそうだ。「わかった、約束するよ、オカアチャン」と答える若者の声に、背中をむけたまま手を振って、彼女は機嫌よく道を進む。

■コミュニケーションを成立させるもの

あるとき彼女は、次のような経験をした。小さな子供を抱いて物乞いをしている男にお金をあげた翌日、また同じ男に出会った。ところがなんと、昨日と同年齢の、ただし違う子供を抱いていたのだ。「私はたいへん不快になって、『恥を知りなさい』と言ったところ、その男は、顔を赤くして立ち去った。」

私にこの話をしたときも、彼女の不快さは、ぶりかえしたようだった。

彼女を不快にしたのは、男が「物乞い」を目的化し、その目的のために子供を小道具にしたトリックを使ったからである。だが、実をいうと、私はこの話を聞いてもそれほど驚かなかった。そのくらいのトリックは使うだろう、という気持ちはどこかにある。物乞いする人を、私ははじめからあまり信用していない、といえればいいだろうか。

だが、彼女はそうではなかった。彼女が「お金をあげる」という行為は、一時的な関係ではあっても、そのいつきにおいては、相互的なコミュニケーションなのである。そこにトリックを使えば、コミュニケーション関係は根本から損なわれてしまう。彼女は、人間の結びつきそのものを裏切るような男の行為を、許せなかったのである。

■「持たない者」との交換関係

彼女は、地下鉄のなかで歌を聞かせられたときも、「いい」と思ったときはお金を出す。ただし、地下鉄駅の通路で演奏している人には出さない、という。私は「おや」と思った。地下鉄駅で聞こえる演奏は、私の聞いたところ、悪くない。すばらしい経歴をもった音楽家が演奏していることもあると聞く。

だが私の友人は、こういう人にはお金をあげる必要がない、というのだ。その理由は、彼らは、演奏する場所を買った人たちだからである。「〇〇駅」の場所は、朝早く窓口に並んで買うのだそうだ。そのチケットを示せば、警察に追われることもない。彼女はこの事情を知ってから、チケットを買うほどのお金を持っている駅の音楽家たちには、お金を出さないことにしたという。

彼女が「お金をあげる」のは、お金を必要とする人に対してであって、演奏に対してではない。一方、私は、演奏に対してお金を出すほうを好む。私は、「お金をあげる」という行為を、音楽という「商品」を買うことに読み替えようとしているのだ。商品を買うほうが、私にとって抵抗がないからだ。

私の友人は、人に対してお金をあげるのであるが、私は、人に対してお金をあげることができない。それが悪いとは思わないが、友人と私の意識には、たしかに違いがある。

その違いとは、相手との間にコミュニケーション関係を認めるかどうかということである。「お金をあげる」ということは、それが一方的な給付関係であれば、

当事者の間にいずれは上下関係を形成することばを交わすことで、この上下関係が相殺されるとは、私は考えない。だが、彼女がことばを交わすということには、上下関係の相殺とは別の意味がある。

それは、一方的に給付される側の人間の存在を、そのままの形で彼女が認め、受け入れているということである。

商品を介在させる交換関係であれば、一方的な立場の優劣は起こらない。ただしその場合、商品をもたない人の存在は認められない。無言でお金を落としていく人が、お金を受ける人の存在をどの程度認めているのかは、不明である。きわめて否定的な場合もあるだろう。

■大都市の社会空間

私の友人の行動から私が考えたことというのは、大都市の人間関係のありようだ。彼女が重視しているのは、刹那的で、対面的なコミュニケーションである。そのような人間関係を、大都市の社会空間は、歴史的に醸成してきたのではないかと私はいま考えている。

私は、そのような大都市の都市人の行動様式を身につけていない。そうかといって村的な人間関係に従っているわけでもない。そのどちらつかずの未熟さを、私は自分のなかに認めるのである。

